

2026年5月10日「あなたの信仰が直した」

ルカの福音書 17章 11～19節

前回は 17章 1～10節を通して、つまり、赦しの問題から赦しを求めた弟子達に、主は「からし種ほどの信仰があれば」を教えられました。また、主のしもべになることについて具体的に教えられました。

1. ツアラアトに冒された人々 (11～13節)

- ①エルサレムに上る道 (11)「そのころイエスはエルサレムに上られる途中、サマリヤとガリラヤの境を通られた。」

ルカの福音書はガリラヤ伝道を終えて、エルサレムに向かう行程における出来事や教えが多く盛り込まれていることはしばしば伝えていますが、ここにもそれが記されています。今、イエスとその一行は、サマリヤとガリラヤの境界にいたのです。サマリヤには異邦人が多く住む地でありました。アッシリヤ帝国が支配していたころからの名残りです。

- ②10人の患者との出会い (12)「ある村に入ると、十人のツアラアトに冒された人がイエスに出会った。」

とある村にイエスと一行が入った時のことです。十人のツアラアトに冒された人々がイエスと出会ったのです。「ツアラアトに冒された人」については新改訳二版や口語訳、新共同訳でも「らい病」と訳しています。聖書協会共同訳では「規定の病を患っている人」と訳しています。新改訳は3版から原語の音をそのまま用いています。なお、ツアラアトについては、レビ記13章において詳しくされています。

- ③患者達の嘆願 (13)「声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と言った。」

イエスと出会った彼らは、この時がチャンスとばかり、「イエスさま、先生。」と呼び掛け、「どうぞあわれんでください」と嘆願したのです。「あわれんでください」という願いは、病気の人だけでなく、問題を抱えるだれでもが、同じようにして願うことができます。ここで、彼らが「声を張り上げて」とあるように、私たちも叫ぶことができるのです。

2. 神をほめたたえた人 (14～16節)

- ①行き祭司に見せよ (14)「イエスはこれを見て言われた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい」。彼らは行く途中できよめられた。」

イエスはツアラアトに冒された人々が、必死に叫ぶのをご覧になって、言われたのです。「行きなさい。そして自分の祭司に見せなさい」。なぜ祭司に見せにいくのでしょうか。レビ記13:2-3,6に「ある人のからだの皮膚にはれもの、あるいはかさぶた、あるいは光る斑点ができ、からだの皮膚にツアラアトの患部が現れたときは、彼を、祭司アロンか、祭司であるその子らのひとりの所に連れて来る。祭司はそのからだの皮膚の患部を調べる。その患部が白く変わり、その患部がそのからだの皮膚よりも深く見えているなら、それはツアラアトの患部である。祭司はそれを調べ、彼は汚れていると宣言する」(2-3節)

「…祭司は七日目に、そのままに見え、患部が皮膚に広がっていないなら、祭司はきよいと宣言する」(7 節)とありますが、祭司の所に行ったのは、彼らの皮膚病の汚れ状態ときよめの判断のためでした。彼らは祭司の所に行く途中できよめられました。言うまでもなく、主イエスの御手がのべられたのです。その結果、彼らはきよいと宣言されたことでしょう。

- ②いやされた一人は引き返し (15)「そのうちの一人は、自分のいやされたことがわかったと、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、」

そのうちの一人は自分が癒されたことを知ると、イエスの所に引き返し始めたのです。それも癒し主である神をほめたたえながら、その道を行きました。彼はイエス様の御力によるものだということがわかったのです。

だからこそ、その憐みに感謝し、主へのほめ歌が口をついて出たのです

- ③ひれ伏して感謝 (16)「イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった。」

彼はイエスの姿を認めると、その足許にひれ伏しました。そして感謝の言葉を述べたのです。驚くべきことに、彼はサマリヤ人でした。彼の神へのほめたたえの姿からすれば、イスラエルの民かと思うところですが、そうではありませんでした。ルカがあえてサマリヤ人であることを記したのは、パウロと異邦人伝道に加わったからでしょう。

3. 神をあがめるために戻りイエスに会った人 (17~19 節)

- ①九人はどこに (17)「そこでイエスは言われた、『十人きよめられたのではない。九人はどこにいるのか。』」

イエスは周囲に問いかけておられます。その内容は、10 人がきよめられたはずなのに、ここにいるのは一人だけだが、いったいその他の九人はどこにいるのか、というものでした。主に救われた者たちが、そのことの価値を十分に理解せず感謝しないのに似ています。

- ②この外国人以外は (18)「『神をあがめるために戻って来たものは、この外国人のほかには、だれもいないのか。』」

世間の常識から言えば、きよめてくださった方の所に戻ってこないのは、恩知らずでありましょう。しかし、ここで主イエスは強調されているのは、彼らが戻ってきてこの一人の男のように、神をあがめることでした。彼のバックグラウンドはイスラエルの民ではなく、異邦人サマリヤ人でありましたが、ここに救いは異邦人に及んでいくことが暗示されているのです。

- ③あなたの信仰が直した (19)「それからその人に言われた、『立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。』」

主イエスはサマリヤ人に言いました。「立ち上がって、行きなさい」。これは、改めてきよめを認め、一般社会に送り出すお言葉でした。そして、何よりも、この男がきよめられたのは、その信仰によるのだということでした。実際、彼の悪性の皮膚病は癒されました。彼は「神を求める者には報いてくださる方であることを信じた」(ヘブル 11:6)からでした。

《展開と結論》

今朝の聖書箇所は、10 人のツアラアトに冒された人達がイエスに会った時に、「イエス様、先生、あわれんでください」と叫ぶと、イエス様から「行って、自分を祭司に見せなさい」とのお言葉をいただいたことに始まります。

「キリエ・エレイソン」というフレーズを聞いた方はそれなりにいるでしょう。「主よ。憐れんでください」という意味のギリシャ語です。古来、このフレーズだけを何回も繰り返す讃美歌が歌われてきました。メロディーは少しずつ、変わっていくのですが、ひたすら「キリエ・エレイソン」と歌っていくのです。「祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただ繰り返してはいけません。」(マタイ 6:7)とありますが、この願いの言葉はそれにはあたらないと考えます。なぜなら、私たちという存在は、どうしようもない者たちで、繰り返しておなじ過ちを犯してしまう愚かな者達だからです。また、自分ではどうにもならないような問題によく遭遇するのです。もうそうだと、主の憐みにすがるしかないのです。「主よ。あわれんでください。」という祈りを、魂の奥底から絞り出していくことは許されているのです。私たちは苦しい時に、主よ憐れんでくださいと祈るしかないのです。それは祈りの本質に関わるものと考えます。イエスのたとえ話のなかに、パリサイ人は自分のしている正しい行いを述べ連ねたのに対し、取税人は目を天に上げようとせず、自分の胸をたたいて、「神様。こんな罪人の私をあわれんでください」と祈ったという部分があります(ルカ 18 章)。「家庭生活、社会生活、仕事も勉強も人間関係、教会生活も…どれもこれも立ち行かない。」そんな時でも、「主よ。憐れんでください!」と叫びます。主はその祈りに耳を傾けてくださいます。

それにしても、ツアラアトから癒され、きよめを認められた 10 人のうちイエスのところに戻って来たのが 1 人だけであったというのはどういうことでしょうか。皆が「憐れんでください」と求めたのですが、9 人はイエス様のことを忘れてしまったのでしょうか。まさか、自分の力でよくなったなどとは思わないでしょうが、浮かれてそのような心が片隅に生まれていたかもしれません。一人のサマリヤ人だけは、イエス様のことを忘れませんでした。そして、何よりも大切なことは、戻ってきた時に彼が神をほめたたえたということです。神への賛美を高らかにしたこと。彼には、イエス・キリストが救い主であるという信仰があったのです。だから、自分を癒しきよめてくださったのも主であることを理解したのです。そして、その主を高らかに歌ったのです。

憐れんでくださいと叫ぶことは誰にでも許されています。そして、その叫びを主は聞き、癒しの御手を伸ばしてくださることも確認しました。しかし、求めている方が、本当に癒し主であると信じるかどうかは問題です。その魂が主につながるためには、信仰が必要なのです。私たちは主なる神からよくしていただいています。救いの恵みにあずかっていることは何よりも感謝なこと。でも、どれだけ主にこのことを感謝しているでしょうか。改めて主の恵みを感謝し、この恵みにあずかる人々が多く与えられていくように祈っていかなくてはなりません。